

武蔵野教育研究

第3巻第7号

2017年5月1日

武蔵野教育研究会

目 次

佐々木 隆	教育実践例 教材に関する学生の反応と指導 —Advanced English Reading—	1
-------	--	---

教育実践例 教材に関する学生の反応と指導

—Advanced English Reading—

佐々木 隆

プロローグ

大学では 1991 年度より自己点検・評価の努力義務、1999 年度より自己点検・評価実施の結果の公表義務化、2004 年度より第三者評価義務化、2008 年度より FD の義務化等、大学教育も改革が迫られている。これに伴い、学生による授業アンケート、教員間の授業見学など、授業の改善に係る事項も行われるようになった。これに加えて、情報公開も求められ、大学教員の保有学位、担当科目、授業の概要、シラバスをはじめ、研究業績等もインターネットで公表される時代である。

本稿では 2012 年度、2013 年度、2014 年度、2017 年度を含めて Advanced English Reading⁽¹⁾ を担当していることから、これまでの点検及び振り返りを含め、今後の改善の一助とすることを目的とする。

1 Advanced English Reading の位置付け

Advanced English Reading は 2004 年度～2012 度までは言語コミュニケーション科目の 2 年次必修科目として、2013 年度以降教育課程編成の見直しがあり、2 年次の選択科目となった。もともとは 1 年次の必修科目 Freshman English Reading のあとを受けて同様に必修科目の位置付けとして配置されていたが、oral 重視の観点から oral 系の新しい科目配置に伴い、選択科目となった経緯がある。1 クラス約 30～40 人程度で推移したが、入学者数の減少や選択科目になったことから、現在は 1 クラス 20 人前後で展開している。

扱う内容も当初は読解を中心していたが、途中から全学挙げて TOEIC 等への英語検定試験推奨などもあり、授業の中でこうした内容のものを取り上げることとなったが、現在では国際コミュニケーション学部の性格を活かして異文化理解や日本文化を海外に発信する目的、日本は海外

からどのようにみられているかといった内容に特化しものになっている。

2 Advanced English Reading の授業内容

筆者は「英語教育の現状報告—授業の実践例から—」(2017)の中の「2 英語指導の方法」で、「(1)Reading の場合」でも報告したが、「読解」だけでなく、Read Aloud も重視している。⁽²⁾ 高等学校では「授業を英語で行うことを基本とする」⁽³⁾ とあるが、大学においてもこうしたことへ段階を追って進められることになる。しかし、英文自体の中身が濃くなれば、日本語により補完しなければならないことも多くなって来る。このあたりのバランスが難しいのが現状である。授業の進行自体は英語で進め、内容的に説明を要するところは日本語の使用はやむを得ないと考えている。高等学校学習指導要領や「グローバル化に対応した英語教育実施計画」(2013年12月13日)では学生の授業中における英語活動を積極的に推し進めているが、大学で実際に授業の際に学生に英文を読ませる活動をさせてみると、いわゆる「読みができない」学生が多くいるのも事実である。大学のレベルにもよるかもしれないが、「読みができない」内容を分析してみると以下の通りとなる。

- 1 単語のところが聞き、読みが止まってしまう。
- 2 意味の区切り目と読みの区切り目が一致しない。
- 3 読み方がフラットになる。発音がカタカナ調になる。リズムがない。
- 4 英語独特の母音等の発音ができていない。

上記の内容はおそらく、大学生だけではなく、高校生や中学生においても共通していることだろう。筆者はかなり前になるが中学校・高等学校でも実際に教壇で教えていた経験もある。中学までは訳すことを前提にしたような訳読型・読解型のスタイルにはなっていないが、それでも英文を読ませてみると、かなり生徒間において大きな差異があった。また、

現在、高等学校の英語の授業のスタイルも過渡期に来ているが、大学に入学した学生に英文を読ませてみても決して上手に読むわけではない。**oral English** で比較的優秀といわれる学生は発音や意味の区切り目でブレスを行っているため、聞きやすい。**Reading Aloud** にしてもいわゆる英会話にしても、発話を伴う活動には共通している部分が多い。

Advanced English Reading の授業では、シラバスででもあらかじめ、**Read Aloud** を行うことを明記し、実際授業では以下をポイントにして **Read Aloud** を行うことを提示した。

- 1 ある一定の速さで読む
- 2 リズムよく読む
- 3 文末の上昇、下降に気をつけて読む
- 4 英語独特の母音に気をつけて読む
- 5 人に聞かせるように読む（人に伝えるように読む）

通常の会話でも棒読みのような会話は無い。従って、上記5はかなり必要ではないかという考えからである。もちろん、すでに上記1～5をマスターして読むことのできる学生もいたが、それはわずかである。上記4がどんなに上手にできても、ただ速く読むだけで終始すると、聞き手は発音はきれいだが、話し手としては上手とはあまり感じないだろう。これは母語での活動を考えてみれば理解できるだろう。母語、ここでは日本語ということになるが、日本語で上記5ができる人はその流れから上記1、上記2は自然に気を付けることになる。これが英語になると上記5に気を付けて読める人は上記1、上記2はやはり気を付けることになるだろう。実際に上記4はあまり達成されなかったが、上記5を中心に読んだ学生の **Read Aloud** は違和感というよりはもう少し発音が上手ならいいのにと印象はあっても、聞けないということはない。これは英語スピーチなどでも同様な現象であろう。「人に聞かせる」「聞いてもらう」という意識は **Read Aloud** の際に工夫がみられるからだ。上

記1～5の要素をすべてマスターすることが望ましいが、発音に自信がない、読むこと自体に自信がないといった学生は多くいる。こうした中で、できる要素からマスターしてもらうことで、自分の読み方が確立されてくる。英語によるコミュニケーションでこれを進めようとするれば、ジェスチャーなどが入って来る場合が想定される。これは、上記5の要素が自然に発動していると考えられる。従って、このような場合には着席して Read Aloud するよりも、立って読むことでいろいろな活動を伴うことができる。英語活動という意味では最も身近な活動である。英語コミュニケーションの入り口としては、すでに英文が用意されているだけに入りやすい。また、内容をアメリカ大統領の演説、ノーベル賞の受賞演説などを活用すれば、単なる Read Aloud から Speech へと発展する。Read Aloud する英文は読解を必要とするというよりは、もう少し内容としては易しいものでよいと筆者は考えている。

英文の内容について「読解」のものと Read Aloud のものは教授の目的が異なるため、同一のものである必要はないと考える。読解の内容で取り扱うものはこれまで様々な経緯があった。当初は必修科目の English Reading では TOEIC 関係の問題を取り扱っていたことから、副教材として読解や Read Aloud 用のものを設定していた。しかし、ネイティブの英語科教員より、英語コミュニケーション強化には Grammar の必要性があるとの提案もあり⁽⁴⁾、読解でも積極的に Grammar を取り上げることとした。もちろん、科目として English Grammar があるが、Reading や Writing の際にはどうしても英文の構造を理解する必要性があるため、当初はかなり特化して授業を進めていたが、むしろネイティブの英語科教員からの提言により、積極的に Grammar を扱うこととした。

読解の内容は国際コミュニケーション学部の特性を生かして、日本文化を海外に発信すること、海外の日本理解を知ることが目的とした。教育課程の編成では日本理解関連科目があるが、これは日本人自身のアイデンティティを確立することの重要性を体現するものである。海外研修

先のアメリカ、カナダの参加者にその感想等聞くと、結局のところ、研修先の学生との交流では日本のことを相手が知りたいと思っけていても、自分たち自身が日本のことをうまく表現できないというものが多かった。

3 グローバルであること

2013年7月17日に高等教育局高等教育企画課高等教育政策室「大学のグローバル化に関するワーキング・グループ 委員名簿」⁽⁵⁾が発表され、審議が継続中である。特にダブルディグリーなどの学位制度について、海外の大学との共同・相互関係について議論が継続中である。これは制度的に問題もあり、法整備なども必要である。

「グローバル」という意味合いは複雑であるが、グローバルな教育を展開するためには国際共通語の英語の果たす役割は大きいことは言うまでもないことだ。グローバルな教養を身に付けた人材を養成するためには、どのようなことが必要であろうか。

- 1 英語が堪能である。
- 2 世界的に問題になっていることについて関心を持ち、自分の考えを発信し、議論できる。
- 3 海外では日本のことをどうとらえているかを知り、さらに日本のことを自分自身の考えで発信することができる。
- 4 海外のことについて考察を深め、自分自身の考えを発信することができる。

上記1は前提として、現在取り組んでいるのは上記3である。2020年東京オリンピック&パラリンピックもあるが、大学の教育方針に沿っていることが重要である。日本人が世界から日本はどう見られているのかを知ることは、異文化理解の上で重要であることは言うまでもないことだ。いまやインターネットを通して世界中から英語によりコメントや学術論文まで読むことができる時代である。そこで海外向けに等身大の日本語

化を発信しているサイト、“Web Japan” (<http://web-japan.org/>)はかなり有益である。このサイトの趣旨は以下の通りである。

Web Japan was launched with the aim of helping people around the world get to know more about Japan and the Japanese. With more than about 300 million hits per year from around the world, it has become one of Japan’s leading websites for information on the country.

The site provides highly reliable information on Japan across many different genres including culture, sightseeing, society, history and nature. The content is provided primarily in English, but a portion of the site is multilingual.

Web Japan is sponsored by the Japanese Ministry of Foreign Affairs (MOFA) and operated by a Japanese non government organization. With the exception of those rights possessed by third parties, MOFA retains all copyrights related to images, etc. as well as author’s personal rights for proprietary materials contained herein.

You can access the information on this site in three ways:

Contents title search: Choose the site best suited to your interest from the 6 content titles on the top page.

Category search: Search from among eight categories “Nature & Geography, Politics & Administration, Economy & Industry, Society, Culture, Travel & Sightseeing, Sports & Leisure, and Science & Technology ”to find the information you need.

Keyword search: Narrow down the information you are searching for by typing in a keyword. You can also do “and/or” searches.

We hope that Web Japan will prove useful in promoting the understanding of Japan among people of the world. ⁽⁶⁾

スポンサーとして外務省(MOFA)が支援しているが、ここには PD (public diplomacy)のもと、Cool Japan の推進を目的としている。

Content

Trends in Japan

Kids Web Japan

Japan Video Topics

niponica

Japan Fact Sheet

Japan Links

Archives

Nipponia

内容は以上のように分類されている。英語による観光ガイドブックの役割も果たしている。かつてチェンバレイン(Basil Hall Chamberlain, 1850-1935)は *Things Japanese* (1890)を出版しているが、これは明治時代のもので、さらにイギリスの日本研究者によるものである。すでにインターネット時代、SNS 時代を迎えると、紙媒体よりもインターネットでの情報が先行して発表される。出典元を思い出せないが、かつて日本のマンガ文化の英文を読んだ時、日本は電車でマンガ本を読めるくらい、治安がよいこと、サラリーマンまで通勤電車内で、恥も外聞もなくでマンガを読む、大人もマンガを読む国という内容であった。今やマンガ本を電車の中で読む姿はほとんどないと言ってよいだろう。今はスマホでゲームや LINE をしている姿ばかりだ。この 10 年くらいの間に世情も一変している。

英文を読む目的がはっきりしていれば、どのような英文がふさわしいかは同時に明確になる。「3 海外では日本のことをどうとらえているかを知り、さらに日本のことを自分自身の考えで発信することができる」

とその内容からすれば、“Web Japan”は「日本のことを自分自身の考えで発信すること」の大いなる一助になる。日本のことを英語で表現しようとする時、いわゆる英語辞典等をもそれを表現するよい例文や事例が少ない。その意味ではこうしたサイトは有益である。日本人が日本のことを説明できないというのもおかしなものだ。かつて、Peter Milward (b.1925)の *Oddities in Modern Japan: Observations of an Outsider* (1980)があり、その翻訳本である別宮貞徳訳『日本人の日本しらず—あなたを動かす“生き方、考え方”』(青春出版社、1980年1月)もあった。*Oddities in Modern Japan*の目次を見ておきたい。

Preface

Part I : Peculiarities in Parlance

Part II : Eccentricities in Education

Part III : Curiosities in Communication

Part IV : Anxieties in Existence

Part V : Population in Motion

Part VI : Variety in Entertainment

Part VII : Features of Food and Fashion

Part VIII : Japanese in General

Glossary

いまでこそ、日本のポップカルチャーは世界中に発信され、1983年にファミリーコンピューターが発売され、その後世界中に浸透した。Milwardが書いたのが1980年であるが、その頃日本で流行っていたInvaderゲームについてもMilwardは取り上げている。分野としてはポップカルチャーに限定されるが、Patrick W. Galbraith. *The Otaku Encyclopedia: An Insider's Guide to the Subculture of Cool Japan* (Kodansha International, 2009)と *The Moe Manifesto: An Insider's Look at the Worlds of Manga, Anime and Gaming* (Tuttle, 2014)といった興味深い

英文書も発行されている。Patrick W. Galbraith は日本に留学し、東京大学で博士号を取得している。

Patrick W. Galbraith earned a PhD in Information Studies from the University of Tokyo, and is currently pursuing a second PhD in Cultural Anthropology at Duke University. He is the author of *The Otaku Encyclopedia* (Kodansha, 2009), *Tokyo Realtime: Akihabara* (White Rabbit Press, 2010), *Otaku Spaces* (Chin Music Press, 2012) and *The Moe Manifesto* (Tuttle, 2014), as well as the co-editor of *Idols and Celebrity in Japanese Media Culture* (Palgrave, 2012) and *Debating Otaku in Contemporary Japan* (Bloomsbury, 2015).⁽⁷⁾

パトリック・ウィリアム・ガルバレス (Patrick William Galbarith) は 2012 年 3 月 22 日に東京大学より *Becoming-otaku: men, girls and movment in Akihabara* で博士 (学際情報学) の学位を取得した。⁽⁸⁾ 学生の興味関心があり、ある程度予備知識のあり、なおかつそれが学術的であれば、理想的である。こうしたアメリカ人の書いた現代日本を論じた学術論文 (博士論文) を読むことは学生にとっては大きなプラスになると考えられる。新海誠監督『君の名は』(2016) の海外での評価などもインターネットを通して発表されているが、こうしたものをいち早く知ることも英語ならではのことになる。

4 どんな英文を読むか

大学で使用する教科書は小学校から高等学校までと異なり、文部科学省認定のいわゆる検定教科書などは存在しない。また、大学は現在3つの方針を明確するように文部科学省より強く求められている。「高大接続改革：『三つのポリシー』に基づく大学教育改革の実現に向けて」⁽⁹⁾ が発表され、2017年4月1日より学校教育法施行規則が改訂さて、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシ

一をそれぞれ策定し、公表しなければならない。

これにより各大学はそれぞれ大学の目指すものを明確することとなる。そうれば、それは各教科目にも反映されることになるのは当然のことである。

通常大学の教科書については前述の通り文部科学省認定の教科書はない。学問の自由があるからである。また、学術に対して認定教科書を定めることなどできないだろう。このため、英語では特に出版社が英語の授業で使用することを目的として教科書が毎年出版されている。特に語学に共通する現象である。教科書の選定ではかなり厄介な問題がある。⁽¹⁰⁾教科書については学生のレベルに合うかどうか毎年気になるところだ。レベル以外には学生の活動がしやすい内容もの、内容がわかりやすいものを選択上、重視している。最終的にレベルの問題は学生による授業アンケートが参考になる。学生も気を遣うこともあるが、易しすぎる、難しすぎるといった項目をチェックするが、これまで大きな問題はなく推移しているが、これも教科書を複数年使用することが多いからだ。新しい教科書を採用した時の授業アンケートが一番気になる。

他の英語の科目では出版されている教科書ではなく、自分で英文を集めた教材を作成する場合もある。また、時事英語ではその日の英字新聞を活用していた時もあったが、これは最近実行していない。むしろ最近利用するのはインターネット上の英文である。先に紹介した“Web Japan”はよく活用することがある。このサイトのいいところは外国人を想定しているサイトのため、日本語バージョンがないことだ。また、外国人向けの英文のため、readingの授業であるが、writingの際に注意すべき点をここから学ぶことができる。「3 グローバルであること」でも述べた通り、日本文化や日本の現状を発信することを目的にする内容を取り扱うため、活字化された出版形式のものよりも、新しい点についてはこれ以上のものはない。

5 今後の課題

Advanced English Reading の現在の目的が日本発信型の内容と Read Aloud であるため、文化的な内容に特化されてしまう傾向がある。国際コミュニケーション学部という性格上、本来であれば、文化的内容に拘らずに、日本が抱える諸問題や国際的な問題を英語で理解することが望ましい。学生の英語以外の専門領域での理解などが高まれば、こうした内容も扱えるものと考えている。母語でも考えないことを第二言語で理解しようとしても、成果は望めない。

Read Aloud については、毎年取り上げる英文があり、それを基準にしている。他にも用意している教材があるが、途中で変更はこれまでにしていない。Read Aloud はまだまだ学生には活動が必要であると感じている。

エピローグ

当初、Advanced English Reading は English Reading に続き必修科目としての位置付けであった。そのため、English Reading と Advanced English Reading の繋がりはかなり濃密であった。しかし、選択科目に移行してからは、English Reading の内容に強く影響されずに、内容を特化して進めている。学生に興味関心のある内容を採用しながら、電子辞書だけでは対応できないような新しい英単語が掲載されていると、ウェブ検索しながら、その英文に格闘することになる。これこそが最新の内容となる。過去の文献を丹念に読む精読もあれば、新しいものを読んでいく方法もある。国際コミュニケーション学部という性格を生かした Advanced English Reading の在り方は、学部の性格を生かし、且つ、学生に興味関心を喚起するものでありたい。

注

- (1) ここで言う Advanced English Reading とは武蔵野学院大学国際

コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科の教育課程表に配置されている科目を指して言う。

(2) 佐々木隆「英語教育の現状報告—授業の実践例から—」(『武蔵野教育研究』第3巻第4号、武蔵野教育研究会、2017年2月)、p.9.

(3) 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』(開隆堂出版、2014年9月)、p.6.

(4) 佐々木隆「英語教育の現状報告—授業の実践例から—」、p.19.

(5) 高等教育局高等教育企画課高等教育政策室「大学のグローバル化に関するワーキング・グループ 委員名簿」

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/meibo/1338072.htm)(2017年1月15日アクセス)

(6) 「Web Japan」(<http://web-japan.org/plaza/about.html>) (2017年1月15日アクセス)

(7) 「Patrick W. Galbraith」

(http://www.goodreads.com/author/show/2949755.Patrick_W_Galbraith)(2017年1月15日アクセス)

(8) 「NDL-OPAC」

(https://ndlopac.ndl.go.jp/F/?func=full-set-set&set_number=532492&set_entry=000001&format=999)(2017年1月15日アクセス)

(9) 「高大接続改革：『三つのポリシー』に基づく大学教育改革の実現に向けて」

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/038/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/04/25/1369683_04.pdf#search=%27%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81+%EF%BC%93%E3%81%A4%E3%81%AE%E6%96%B9%E9%87%9D%27)(2017年1月15日アクセス)

(10) 佐々木隆「英語教育の現状報告—授業の実践例から—」、pp.2-3.

【キーワード】 指導法、読解、read aloud

執筆者一覧

佐々木 隆 武蔵野学院大学教授

武蔵野教育研究 第3巻第7号

2017年5月1日 発行

武蔵野教育研究会 編集・発行

〒350-1328

埼玉県狭山市広瀬台3丁目2番1号

武蔵野教育研究会事務局

武蔵野学院大学 佐々木隆研究室